特集 2
植民地主義研究会　研究報告
「グローバリゼーションと植民地主義」

国際シンポジウム「グローバリゼーションと植民地主義」記録の日本語版刊行によせて

高橋秀寿

2006年9月20日，大韓民国の漢陽（はんにゃん）大学（ソウル）で国際シンポジウム「グローバリゼーションと植民地主義」が「比較歴史文化研究所」の主催によって開催された。同大学教授の尹相仁氏による司会のもとで，まず西川長夫氏が「〈新〉植民地主義について」と題して約一時間の報告を行ったあとに，韓国からは漢陽大学教授で，「比較歴史文化研究所」所長の林志弦氏と，成均館大学東アジア学術研究教授の尹海東氏がそれぞれ「民族主義は＜新＞植民地主義の対案なのか？」と「日本帝国の国民統合と植民地朝鮮」と題して，日本からは小樽商科大学教授の今西一氏と高橋秀寿が「帝国日本と内国植民地――北海道の事例を中心に」と「「植民地忘却」と「ホロコースト忘却」」と題して報告を行った。このシンポジウムは韓国では予想以上に注目され，『東亜日報』ほか三紙が大きく報道したため，多くの聴衆を得ることになった。さらに，韓国の学術雑誌『批評（비평）』14号（2007年春号）がこのシンポジウムを取り上げ，尹相仁氏の序文を添えて各報告が公表された。この特集に収録された各論文は，『批評』誌に載せられたシンポジウム記録の日本語版である。

このシンポジウムの一ヶ月前に西川氏の『＜新＞植民地主義論　グローバル化時代の植民地主義を問う』が平凡社から刊行されていたが，シンポジウムでの西川報告も開催前に韓国語に訳され，報告者と関係者に事前に伝えられていた。そのため，このシンポジウムは＜新＞植民地主議に関する西川氏の問題提起と，それに対する日韓研究者の応答という形をとっている。この問題提起は反響を呼び，残念ながらこの特集に収録することはできなかったが，シンポジウムではグローバル化と植民地主義の変容の問題，あるいはグローバル化に関わって顕著になってきたナショナリズムの問題などについて議論が活発に交わされた。また，2006年11月3日から12月1日にかけて連続講座第17回シリーズ「グローバリゼーションと植民地主義」が国際言語文化研究所によって開催され，その内容もこの紀要の特集1で組まれている。さらに，2007年10月にはふたたび韓国の研究者を招いて，国際シンポジウム「グローバル化時代の植民地主義とナショナリズム」が立命館大学で開催されることになったが，このシンポジウムでは中国と台湾からも研究者が招聘され，多くの日本人研究者の参加も予定されている。

このように，西川氏の問題提起は国内外で議論される機会を得て，その議論は国際的な広がりを見せている。韓国でのシンポジウムはこのような広がりのまさに原点であるともいえよう。今回のこの特集がその広がりをさらに促し，有益な議論がますます展開されるきっかけになることを期待したい。